
名前 「

」

はちがつじゅうごにち

つき い い

八月十五日ばかりの月に出て居て、かぐや姫、いといたく泣き

たもウ ひとめ

たまワ な たもウ

給ふ。人目もいまはつつみ給はず泣き給ふ。これを見て、親ども

なにげにと

とイさわ

も、「何事ぞ」と問ひ騒ぐ。かぐや姫、泣く泣く言ふやう、「さ

もう

ン おもイ

こころまどワ

たまワン

きざきも申さむと思ひしかども、『かならず心惑はし給はむもの

おもイ

いま

す

はべ

ぞ』と思ひて、今まで過ごし侍りつるなり。『さのみやは』とて、

い

はべ

み

くに ひと

つき

うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、この国の人にもあらず、月の

みやこ

ひと

都の人なり。

ン

むかし ちぎ

せかい

モ

それをなむ、昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまう

き

いま かせ

つき

じゅうごにち

で来たりける。今は帰るべきになりになれば、この月の十五日に、

もと

くに

むかエ

ひとびとモ

コン

かの故の国より、迎へに人々まうで来むず。さらずまかりぬべけ

おぼ

なげ

ン かな

はる

おもイ なげ

はべ

れば、思し嘆かむが悲しきことを、この春より、思ひ嘆き侍るな

いイ

な

おきな

「こは、

ジョウ

り」と言ひて、いみじく泣くを、翁、「こは、なんでふことのた

モウ

まふぞ。

たけ

なか

み

なたね

おお

ワ

竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさおはせしを、

たけた

なら

やしなイ

こ

なにびと

むかエ

わが丈立ち並ぶまで養ひたてまつりたるわが子を、何人か迎へき

ン

ゆる

いイ

し

こえむ。まさに許さむや」と言ひて、「われこそ死なめ」とて、

な

泣きののしること、いと堪へがたげなり。

たエ